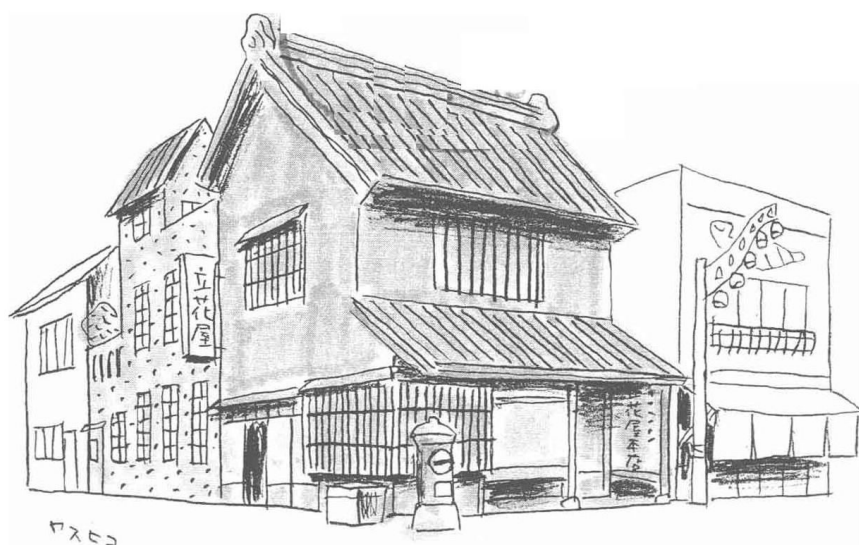




新潮社

和菓子屋の息子
ある自伝的試み

林信彦



わ が し や む す こ
和菓子屋の息子——ある自伝的試み^{じでんてきこころ}

1996年8月20日発行

1996年11月10日3刷

■著者 ^{こばやしのおひと} 小林信彦

■発行者 佐藤隆信



■発行所 株式会社新潮社

郵便番号162 東京都新宿区矢来町71 振替00140-5-808

電話 編集部(03)3266-5411 読者係(03)3266-5111

定価 1,400円

■印刷 大日本印刷株式会社 ■製本 大日製本印刷株式会社

© Nobuhiko Kobayashi 1996, Printed in Japan

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。

送料小社負担にてお取替えいたします。

価格はカバーに表示してあります。

ISBN4-10-331821-X C0095

和菓子屋の息子——ある自伝的試み 目次

- 一 山の手の娘、下町へ行く 7
- 二 世にも奇妙な家の内部^{なか} 16
- 三 失われた町の地図を作りながら 26
- 四 下町には〈通俗的な人情〉はない 36
- 五 町の成立ちから裏店^{うらだな}まで 47
- 六 黒豹事件と〈ニュース映画館〉 58
- 七 昭和十年代・物売りのいろいろ 67
- 八 下町人気質について 78
- 九 下町ことばのゆるやかな消滅 87
- 十 キネマの都でⅠ 98
- 十一 キネマの都でⅡ 108
- 十二 開戦前夜の嫁さがし 119
- 十三 空襲なんかこわくない 129

十四	〈老舗〉の人びと	138
十五	スーパースター・高勢実乗	149
十六	青春時代の原節子	159
十七	下町人種のエンタテインメント	168
十八	防空演習と縁談	179
十九	空襲の前夜	188
二十	町が消滅する日	197
二十一	〈平和〉と十一年ぶりの川開き	208
二十二	〈老舗〉の消滅 I	218
二十三	〈老舗〉の消滅 II	228
二十四	山の手の娘の死、そして……	239

装幀

新潮社装幀室

カバー絵地図
扉・本文カット 小林泰彦

和菓子屋の息子

——ある自伝的試み

一 山の手の娘、下町へ行く

一九三一年（昭和六年）は〈満洲事変〉が始まった年である。そう言われても、ぴんとこないとおっしゃる方のためにつけ加えれば、マルクス兄弟の「けだもの組合」が帝都（東京）の映画館で封切られた年でもあります。

そして――。

東京市赤坂区青山南町の高宮家では、五番目の娘の嫁入り準備に忙しかった。嫁入り先はといえば、日本橋区米沢町の和菓子屋・立花屋本店である。

米沢町は、やがて町名が両国になるから、以下は〈両国〉と記してゆくが、ひとことでいえば、山の手（青山）の娘が下町（両国）に嫁する――ということである。

慎重を期した高宮家では、主人の信三みずから両国におもむき、近所のそば屋で立花屋の様子を調べている。見合いが無事にすみ、仲人が両家を往復しているさいちゅうでも、高宮家の一人が税務署員に化けて、なおも立花屋の内情を探っている。

高宮家はべつに名家というほどのものではない。当主の信三は沖電気工業を退社して、青山南町（現・南青山）で歯科機具の町工場を経営していた。ご維新まえにはサムライだった――とい

うが、そんなことをいったらきりが無い。技術者出身としてはかなりの成功者で、屋敷町の中で町工場をやっていた。関東大震災があっても、高台の青山は被害がすくなく、家も工場も無事であった。

高宮信三のこの慎重さは、〈下町の商家〉のイメージがつかめなかったからである。彼の子供は八人。いちばん下の女の子が玉で、信三はかわいいがっていた。

読者は退屈かも知れない。ぼくもこういう叙述はいささか退屈なのだが、もう少し、お付き合いがいたい。

で、米沢町二丁目五番地の立花屋本店のはなしである。

玉の結婚の相手は、いずれ立花屋を継ぐはずの耕一郎である。世間知らずの、といって悪ければ、他人の悪意をあまり知らない二枚目だ。結核になった過去はあるが、まあ、ノホホンと育ってきた。彼の父親である八代目・小林安右衛門が超やりてだったからである。

もう、ばれたと思うから、開き直ってしまうが、八代目・小林安右衛門はぼくの祖父で、耕一郎はぼくの父親だ。

安心していただきたい。これから、えんえんとわが家の歴史を綴ろうなどという気はない。ぼくにそういう才能があれば、下町版『榎家の人びと』が書けるだけの材料はあるのだが、やりません。では、何をやるかというと、戦前戦時の下町の〈商家の生活がどういうものであったか〉を具体的に書いていこうというのである。一九四五年三月十日の下町大空襲とともに〈無〉になって

しまった世界です。

《無》になった、とあっさり書いてしまうと、本当かい、という人がいそうだから、隅田川の向う側の生活者、吉本隆明氏の文章を引用する。

《……ただ下町の大変貌をとらえるなら、昭和二十年（一九四五）三月十日の大空襲を折り目にするほかに、つくづく思い知らされた。下町はこの日から潜在的に「町殺し」の手が入ったことになる。》

正直にいうと、ぼくは、《商家の生活》について、こういうスタイルで書こうとは思っていなかった。

重い腰をあげた理由の一つは、もう少したつと、自分がすべてを忘れてしまうのではないかという恐怖からである。江戸文化の名残りは関東大震災で消えてしまったといわれるが、その余燼（よじん）までは大空襲まで残っていたと記憶する。その記憶をなんとかよみがえらせてみたい。ぼくの祖母までは江戸弁なので――父親も一部江戸弁だったが――、それらを想い出すことができるかどうか。なんといっても江戸文化を支えていたのは言葉（ことば）なのだから。

もう一つの理由は、テレビ、雑誌、情報誌にはびこる《にせの下町》幻想への違和感である。《懐かしの下町》では《人情あふれる庶民》が《べらんめえ口調》で語り合っているといった奇怪な幻想。

ここで釘をさしておきたいが、いわゆる《べらんめえ言葉》は職人や河岸（かたし）の言葉である。商人（あきんど）はあんな言葉は使わない。品物を売ってお金をいただく商人が、喧嘩（けんか）口調でものを言うはずはない。（ただし、成功した商人で、もとは職人というケースも多いから、いちがいに言えないが。）生

れてから二十歳で両国を離れるまで、ぼくはへばらんめえ言葉を耳にしたことは一度もない。

八代目・小林安右衛門をぼくはまったく記憶していない。

立花屋は商人によくある母系家族で、優秀な菓子職人をひろいあげて、長女の婿にする。千葉県の八日市場町から出てきた大川由松（丁稚の名前ですね）は、七代目に見出されて、八代目・小林安右衛門になった。

この人はせっかちで辣腕で、毀誉褒貶なかばするようだ。店を大きくするだけではなく、ガソリンスタンドを経営したときいたことがある。関東大震災のあとは区画整理委員になり、そこまではいいのだが、いちばん良い場所を自分が取ってしまった、ともきいた。真偽定かではないが、地方出身の出世主義者でもあるような気がする。

安右衛門の子供も八人。長女の清子だけが亡くなっていて、残りの七人は全部家の中にいた。

高宮信三が心配したのはそのあたりではないか。そして、結婚話が進んだのは、両家が各々の職業なりに中流だったからだと思う。

ともあれ、三月二十八日、上野精養軒で式があげられ、五時から披露宴がおこなわれた。晩餐ばんさんのメニューを書きうつしておく。

献立

一 濃羹のうきん

一 伊勢海老姿焼

一 牛織肉蒸煮

一 七面鳥燂はんぎ焼

一 水菓

一 雜菓果

《濃羹》はコンソメだと思う。こうした書き方のメニューは少し前までよく見かけた。肉が一品多いような気もするが、当時の精養軒らしく充実している。宴のさなかに、耕一郎の謡曲の師である宝生新あほうが一曲うたった。

ぼくの家は下町大空襲で写真をあらかた消失したが、この結婚式の写真は手元にある。親戚の誰かがくれたのだろう（注・この本の表紙カバーをとってみて下さい。これが結婚式の写真です）。

高宮信三は肥満気味の男で、顔が大きく、完全な禿頭くどう、鼻下びかとあごにひげを生やしている。彼は発明家でもあって、さまざまな特許を持っていたが、気むずかしげで、近寄りがたい雰囲気を感じさせる。モーニング姿で扇子せんすを手に行っている。

八代目・小林安右衛門は和服の正装で、当然のことながら扇子を持っている。色が黒く、苦勞のかたまりみたいな顔だが、ふちなし眼鏡をかけた顔は《人類の祖先》を連想させる。

その左側にいる安右衛門の妻のいしは、七代目の娘であるが、およそ《下町の家つき娘》らしくない顔をしている。若いころは《米沢町小町》とうたわれたというのだが、目が凹ぼこみ、頬が出

た、面長な顔は、当時の審美規準に合っていたのだろうか？ 彼女によく似た顔は日本人では思ひ当らない。

混血を重ねるほど美人が生れる、とぼくは信じているが、日本国内でも同じような気がする。ぼくの家は代々、家つき娘に婿（職人）をとるスタイルなので、それなりに混血がうまくいったのか。

いしによく似たヨーロッパの女優をひとり知っている。マレーネ・ディートリッヒである。

——笑わないでいただきたい。「嘆きの天使」と「モロッコ」が封切られたのも、この一九三一年で、いらい、いしはディートリッヒと呼ばれるようになった。（それから二十数年後、彼女はぼくに、「あたきしはディートリッヒに似てたんですからね」と念を押した。）

写真の最前列中央には、耕一郎と玉が和服でならんでいる。耕一郎は歌舞伎役者風の美男である。玉は（ぼくの審美眼からみると？だが）世間では美女といわれたらしい。つまりは、美男美女の結婚である。

九日間の新婚旅行（関西方面）を終えて、玉は朝食の膳につく。

「さあ、遠慮せずにおあがんなさい」

と、ディートリッヒにいわれて、玉はカルチャー・シヨックを受けた。お膳の上には、ご飯、味噌汁、漬け物、きやらぶきのほかに、なにもなかったからである。

東京の下町の食事の貧しさについて、もつともはつきり書いたのは日本橋蠣殻町生れの谷崎潤一郎である。東京の食には名物がなく、浅草海苔、納豆、佃煮、タタミイワシ、とくにへあの麩

糊に似たタ、ミイワシを考へると、私は悲しくなるのである」とまで極言している。これは真実だ。一九三四年（昭和九年）に書かれた『東京をおもふ』の中にあるのだが、谷崎は「私は現在では自分を東京人であるとは思つてゐない」と明言している。

立花屋の食卓が貧しかったのには別な理由もある。一九三一年には、番頭、小僧、職人、女中が少くとも十数人はいたはずだから、主人側の家族だけがうまいものを食べるわけにはいかない。どういふおかずが出たか、女中は主人側と奉公人の双方の食卓を知っている。大差のあるものを食べてはまずいのである。

玉が大きなショックを受けた理由は、実家の食卓が種類豊富だったからである。これは、山の手だから、というわけではなく、信三の妻が（つまり玉の母親が）、長与家に奉公していたため、とぼくは教えられている。『青銅の基督』を書いた白樺派の長与善郎の生家である。だから、高宮家の味は長与家のそれを引いているというのだが、保証の限りではない。

耕一郎は美食家といつてよからう。彼の趣味は、自動車、旅行、美食であった。家の外では美食をする、というのは、商家の跡取りらしい在り方である。

あくる一九三二年（昭和七年）三月に、小林家は目黒の菩提寺で法要をおこない、高宮夫妻を呼んでいる。法要は午前中で、雅叙園で午餐が供された。その菜单を書きうつしてみる。

四冷葷（前菜）肉捲、海蜇

白鶏、燻魚

一 芹菜鮮貝（セロリと貝の炒めもの）

- 一 炸烹小鷄（鷄のからあげ料理）
- 一 紅焼魚翅（フカヒレ姿煮）
- 一 炸捲筒鷄（鷄の巻き揚げ）
- 一 拔絲山藥（ヤマイモのあめだき）
- 一 川四宝湯（スープ）
- 一 碎熘鯉魚（鯉のあんかけ）

午餐としては良いメニューである。上野精養軒といい、目黒雅叙園といい、メニューは今日とほとんど変わっていないことがわかる。

おい、おい、という声がきこえてくる。一九三一年、三二年のメニューがどうしてわかるんだ？

わかるのですよ、それが。

記憶力においては若干の自信があったのだが、いまや、だいぶん怪しくなっている。いや、かなり怪しいかも知れない。なにかの参考書がなかったら、この仕事はおぼつかない。

ぼくの手元に、かなり分厚い、形容のしようもない、へ日録のようなものゝが四冊ある。日本橋の榛原^{はしはら}で買った紙を二つ折りにして、ペンで書いたものだ。それらを紙縫^{こぎ}りで綴じて、表紙をつけ、〈小林〉と筆で記してある。

書いた人は高宮信三である。ぼくの知る限り、彼は五人の娘の嫁入り後の行動についてメモを